

# 週刊新潮

2月16日梅見月特大号

特別  
定価390円

TEMPO TOWN

## 近未来「人口1/3減」で 変貌する「葬儀と墓場」

日本の人口8674万人、えていゝるんです

うち65歳以上の割合は39・9%——恐ろしい数字である。現在よりも人口は3分の1減り、一方で高齢化がどんどん進むというのだ。

実はこれ、国立社会保障・人口問題研究所が推計した、2060年の日本の姿。それによれば今後48年間、亡くなる人の方が生まれる数より多いわけだが、家族制度が崩壊し、個別化が進むこれからの社会では、誰がどう申うのか。

「実は最近、一人暮らしのお年寄りからのご相談が増えているんです」といふのは、全日本葬祭業協同組合連合会（全葬連）事務局。

「身寄りがなければ自分を申うだけのお金はあるから、自分が死んだらそれで葬式を出してほしい」といったお話もあります」

地域によっては1日に4、5件もこうした相談があるという。全葬連ではこの3月以降、事前相談員資格を内部で設け、人生のしまい方への相談に向き合う態勢を整える。

お葬式が終われば、次はお墓だが、こちらも今、転換点に立っている。

「普通は故人の親族が、祭祀承継としてお墓を維持していくのですが、それが難しくなってきた（墓地を持つ寺院の住職）」

過疎の進んだ地域では、

墓を守る親族すらいなくなつて墓地が荒れる一方で、都市部では、承継者自体がいなくても数多い。そこで近年増えているのが、水代供養墓だ。

「だいたいは納骨堂形式の霊園ですが、承継者を決める必要がなく、あらかじめ水代供養料を払っておけば、年忌供養は霊園がやってくれる」（業界関係者）

合理的と言えは聞こえはいいが、素漠とした感が深うのも否めない。

「かつてお弔いは親族というタテと、地域というヨコのつながりでなされていた、それが切れて、死ににくい国になった」（先の住職）

「千の風」はいったいどこを吹き抜けていくのだろうか……。

ここもいずれは五臓の山か



読者  
指南

6